大島先生に教えていただいたこと

若松由美

私が初めて大島先生にお目にかかったのは、大学院に入学する前年の春のことです。その頃私は、その年の大学院の入試に失敗し、進学をあきらめ日本語学校に勤めるつもりでいました。そんな時に突然、大島先生からご連絡があり、お会いすることになったのです。なぜ、入学できなかった私が呼ばれるのだろうと、不安に思いながらも、先生の研究室を訪れました。すると先生は笑顔で私を迎えて下さり、「若松さんの慣用音の研究はおもしろいから、もう一度大学院を受験して、一緒に研究をしませんか」とおっしゃって下さいました。私は驚くとともに、入学できなかった者のことまで気にかけて下さったことを、大変うれしく思ったのを今でもよくおぼえています。

その後、大学院入学まで、先生の講義を聴講させていただきながら受験勉強を続け、次の年には入学することができました。今にして思えば、あの時先生がお声をかけて下さらなかったら、大学院で研究を続けることはできなかったのではないかと思い、大変感謝しています。

大学院入学後は、先生は研究に対して大変厳しく、私たち学生はゼミや研究発表の時は緊張の連続でした。私たちが少しでもいい加減なことを言ったり、調査が甘かったりすると、厳しく追究され、何も答えられず、涙を浮かべうつむいてしまうことも多々ありました。そのような訳で、ゼミの後などは、どこが悪かったのかをみんなで話し合い、いつも自然に反省会になってしまいました。

また、これは私自身のことですが、先生に私の修士論文を意味のある研究にするためには、どのように展開していったらいいのかを問われ、なかなか答えが出せず、3カ月間悩んだこともありました。その時は、寝てもさめてもそのことで頭がいっぱいで、眠れない日もあった程です。あんなに一つのことについて深く考えたことは、今までなかったのではないかと思います。

しかし、そのような問答を繰り返す中で、先生は私たち学生に、自分で考え自分で道を切り開いていく力を養って下さっていたのだと今ふり返って思います。修士

論文を書き終えた時、内容にはまだまだ満足がいきませんでしたが、研究テーマについて自分で考え自分で答えを出せたという自信は得られました。そしてこの自信は、研究に限らず、生きていく上での自信にもつながっています。

先生の厳しい面ばかり書いてしまいましたが、研究を離れた時の先生は、いつも私たち学生一人一人のことを気にかけて下さる、大変優しい先生です。先生のご趣味のお写真のことは、私が申し上げるまでもありませんが、何かある時にはいつも記念に写真を撮って下さり、そしてその都度、写真に写っている人全員に差し上げていらっしゃるので、その数をすべて合わせると天文学的な数字になるのではないでしょうか。私も大学院の2年間にいただいた写真は100枚ほどになり、お陰様で貴重な記録になっています。

また先生は，私たち学生に対してもそうですが、誰に対してもいつも感謝の気持ちをお持ちで、年上だから、大学の教授だからといって奢ることもなく、謙虚でいらっしゃる姿を拝見し、見習わなければならないと常々思っています。

先生に教えていただいたことはその他にも沢山ありますで、書ききれませんが、最後に、先生がゼミの時におっしゃったお言葉の中で、今でも強く印象に残っているお言葉がありますので、そのことについて書きたいと思います。それは、「言語の研究にはロマンがある」というお言葉です。

その時私は、ちょうど修士論文の調査のため、平安から江戸時代までの辞書を、何冊も調べていました。それは、辞書を1ページ1ページ開いて、調査に該当する語を見つける気の遠くなるような作業でしたが、そのようにして辞書を調べていくうちに、その時代の人々の言葉に対する思いが伝わってきて、調査を忘れて何時間も辞書を読んでしまうことがよくありました。ですから先生のお言葉には、本当に共感しました。これは私だけのことではなく、ゼミの学生全員が共感し、後でそのことについて話したほどです。

これから書くことは私の勝手な想像かもしれませんが、先生は方言の調査で全国各地を回られて、話者一人一人とお話になった時、その土地の人々の言葉に対する思いや、言葉が受け継がれてきた歴史の重みを感じ取られて、そのようなことをおっしゃったのではないかと思います。長く研究をお続けになってこられた、先生だからこそおっしゃることができるお言葉だと思いました。

ですから、先生、どうかこれからもロマンを追い続けていただきたいと思いま

す。そして今後も、お元気で、私たち学生をご指導下さいますよう、お願い申し上げます。本当にありがとうございました。